

令和元年5月27日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04030

研究課題名(和文) 個別面接法調査における調査員効果に関する計量的研究

研究課題名(英文) Research on interviewer effects on reporting in an interviewer-administered survey

研究代表者

小林 大祐 (KOBAYASHI, Daisuke)

金沢大学・人間科学系・准教授

研究者番号：40374871

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：個別面接法調査において、調査員の目に見える特徴が回答内容に偏りを生じさせる可能性が指摘されているが、日本においてはまだ少ない。そこで全国規模の無作為抽出調査データと調査員の基本属性を組み合わせたデータセットを用いて、調査員の年齢や性別、およびそれらと回答者属性の組み合わせが回答に与える影響について検討した。性別役割意識を従属変数とした分析の結果、回答者の「年齢」と「調査員男性ダミー」のクロスレベル交互作用効果が有意となった。これは高年齢者ほど性別役割分業に対して肯定的な態度を持っているにもかかわらず、女性調査員を前にした場合には、そのような意見表明は避けられやすくなると解釈できるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題研究において示された知見からは、ジェンダーに関する質問を含む調査では、面接調査員の性別についても考慮する必要があることが示唆される。例えば、継続調査などの場合、調査時点によって、調査員の性別比が極端に変更することは望ましくないと思われる。そして、このように調査データの質に対して、調査員の影響が無視できない以上、今後中長期的には調査員の介在が最小限となるような調査モードを本格的に導入することが必要であることが明らかになったことは本課題研究の重要な意義である。

研究成果の概要(英文)：In recent years, an increasing number of studies have examined interviewer effects. However, previous studies were mainly based on data from surveys only conducted in Western countries. Since the effects of observable traits of interviewers have usually been discussed in connection with the cultural context of each society, it is important to examine whether the tendencies about interviewer effects on reports in Japan are the same in Western countries. Thus, the main goal of this study is to investigate the effects of observable traits of interviewers on survey responses in Japan, using national sample survey as a dataset. As a result, we found that the cross-level interaction effect between interviewer-gender and respondent-age is significantly positive. Taking the negative effect of respondent-age as the main effect into consideration, we could interpret these results as older people reporting more gender-role egalitarian answers than they actually have before a female interviewer.

研究分野：社会学

キーワード：社会調査 調査票調査 調査員効果 性別役割意識

1. 研究開始当初の背景

調査票を用いた社会調査、特に意識や態度を測定することを目的とする調査において、調査員の存在が回答に影響する可能性は様々に指摘されている。センシティブな事柄についての質問において、このような影響が起りやすいことが知られているが、階層意識に関する質問項目において、調査員の存在が回答に影響しているかは明確な結論が得られていない。当該研究代表者は、これまで階層的な地位の主観的な認識について尋ねた階層帰属意識項目に焦点をあて、自記式で行われた調査と他記式で行われた調査の項目を比較することで、2つの調査における分布の違いが、調査員の存在に起因する可能性が高いことを示してきた。

そして、この研究の過程で、調査員が与える回答内容への影響が、調査員の性別によって異なっているという可能性が見いだされることになった。ただ、このような可能性を検証するためには、調査員の基本属性のデータが組み合わされた個票データが必要になる。本研究においては統計数理研究所の前田忠彦氏の協力のもと、調査員属性がマージされた調査データを準備できたことで、全国規模の無作為抽出サンプルの調査データを用いた調査員変動の検証を行うことが可能になった。

2. 研究の目的

個別面接法調査においては、調査員の「目に見える調査員の特徴」が、回答内容に系統的な偏りを生じさせる可能性が様々に指摘されている。海外の研究においては、調査員の人種 (Schuman and Converse 1971) や年齢、そして性別 (Kane and Macaulay 1993; Huddy et al. 1997) が、そのような特徴に関わる意識や態度についての質問の回答に影響するという研究の蓄積が進んでいる。しかし、日本においては、欠票への影響については研究がなされているものの (松岡・前田 2015)、回答内容への影響を検討した研究はまだ少ない。調査員の年齢や性別の影響は、その社会における文化的な文脈に左右されると考えられることから、日本において海外の研究と同様の傾向が見られるか確認することには大きな意義があるはずである。このような目的から、全国規模の無作為抽出調査データと調査員の基本属性を組み合わせたデータセットを用いて、調査員の年齢や性別、およびそれらと回答者属性の組み合わせが回答に与える影響について、特に性別役割分業意識に焦点を当てて検証を行った。

3. 研究の方法

データは2015年に全国の20から64歳を母集団として行われた第1回SSP調査データを用いた(計画標本9000、有効標本に対する回収率は43%、調査モードは、タブレット端末を用いた個別面接法)。従属変数は、性別役割分業意識項目2つ(「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」「夫が妻と同じくらい家事や育児をするのはあたりまえのことだ。いずれも「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法)を合計することでフェミニズム的な回答のしやすさの程度を表す「性別役割平等志向」として得点化したものを従属変数とした。

独立変数としては、回答者レベルの変数として「男性ダミー」「年齢」「教育年数」「非正規ダミー」「専門管理職ダミー」「事務販売ダミー」「対数等価所得」「財産得点」を、調査員レベルの変数として「調査員男性ダミー」「調査員年齢」を投入した。なおダミー変数以外はセンタリングした値を用いている。

分析においては、本研究で用いるデータが、回答者が担当調査員にネストしたマルチレベルデータのためマルチレベル回帰分析を用いる(Hox 1994)。その際、調査員レベルの変数、性別の主効果、そして、調査員レベルの変数と回答者属性を組み合わせたクロスレベル交互作用効果の有無が焦点となる。

4. 研究成果

分析の結果、「調査員男性ダミー×年齢」のクロスレベル交互作用効果が有意プラスの効果を示した。この傾向は、年齢の主効果(交互作用項を含むモデルにおける主効果は、調整変数の値が0の場合の効果の意味するので、調査員が男性の場合の効果)がマイナスであることと合わせて考えると、高齢層ほど性別役割平等志向に否定的だが、その意見を女性の調査員を前にしたときには表明しにくくなるという解釈できよう。

これらの傾向からは、日本においても、調査員属性の回答内容への影響が存在すると言える。そして、本研究の知見からは、ジェンダーに関する質問を含む調査では、面接調査員の性別についても考慮する必要があることが示唆される。例えば、継続調査などの場合、調査時点によって、調査員の性別比を極端に変更することは望ましくないとと思われる。また、調査員による影響が必ずしも回答者に均一に作用していないという可能性は、この問題に対し「社会的望ましさ」尺度のような、調査員からの影響の受けやすさについての変数を作成して統制すること

にも限界があることを示唆する。したがって、今後中長期的には調査員の介在が最小限となるような調査モードを本格的に導入することが必要であると思われる。

ただ、今回用いたデータでは、多くの大規模調査がそうであるように、ある調査地点を特定の調査員が担当するという形で調査がなされており、地域の影響が交絡して現れている可能性は否定できない。したがって、今後は、地点データも用いて、このような可能性についても検討していくことが課題となる。

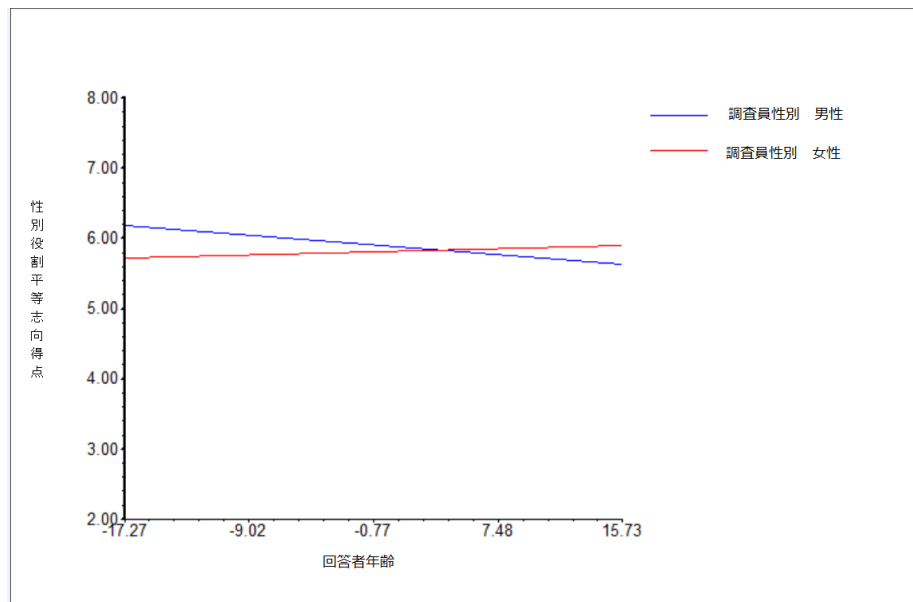


図 性別役割平等志向得点に対する、回答者年齢と調査員性別のクロスレベル交互作用効果のグラフ

引用文献

- Hox J. J. 1994. Hierarchical Regression Models for Interviewer and Respondent Effects, *Sociological Methods & Research* 22(3): 300-318.
- Huddy, Leonie, Joshua Billig, John Bracciodieta, Lois Hoeffler, Patrick J. Moynihan, and Patricia Pugliani, 1997, The effect of interviewer gender on the survey response, *Political Behavior*, 19 (3) : p.197 -220.
- Kane E.W. and Macaulay L.J., 1993, Interviewer gender and gender attitudes, *Public Opinion Quarterly*, 57 (1) : 1-28.
- 松岡 亮二・前田 忠彦, 2015, 「日本人の国民性第13次全国調査」の欠票分析:個人・地点・調査員の特性と調査回収状況の関連」『統計数理』63(2):229-242.
- Schuman, H. and Converse, J.M., 1971, The effects of black and white interviewers on black responses in 1968, *Public Opinion Quarterly*, 35(1):44-68.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 6 件)

小林大祐、SSP2015 の調査モード、CAPI について、第 1 回人間科学フロンティア公開講座：最新データからみる階層と社会意識：共生社会の実現に向けて、大阪大学中之島センター、2018、依頼有り

小林大祐・前田忠彦、調査員の年齢・性別が性別役割分業意識の回答に与える影響について：SSP2015 データを用いた分析、第 91 回日本社会学会大会、甲南大学、2018

小林大祐、壮年非正規雇用であることが階層帰属意識に与える影響について：「就職氷河期世代」に注目して、経済社会学会第54回全国大会、慶應義塾大学、2018、

小林大祐、調査員の存在は調査票調査における回答内容に いくらかの影響を与えるか：SSP2015 データを用いた分析、同志社社会学研究学会第24回大会、同志社大学、2018、依頼有り

小林大祐・前田忠彦、調査員の性別が性別役割分業意識に与える影響について：SSP2015 データを用いた分析、第90回日本社会学会大会、東京大学、2017

小林大祐、調査票調査における「社会的望ましさ」バイアスの検証：実験的デザインにもとづくモード比較調査データによる分析、第89回日本社会学会大会、九州大学、2016

〔図書〕(計 4 件)

小林大祐、「就職希望者のプロフィール：30年間の変化に着目して」尾嶋史章・荒牧草平編『高校生のゆくえ：学校パネル調査からみた進路と生活の30年』、世界思想社、pp.45-63、2018年

小林大祐、「働き方と地位アイデンティティ：正規への移動障壁が非正規の地位アイデンティティを低めるのか？」数土直紀編『格差社会のなかの自己イメージ』、勁草書房、pp.93-117、2018年

小林大祐、「実査の方法：どのようなデータ収集法を選べば良いのか？」「データの基礎的集計：たくさんの情報を要約する」轟亮・杉野勇編『入門・社会調査法(第3版)：2ステップで基礎から学ぶ』、法律文化社、pp.62-78・pp.146-160、2017年

小林大祐、「生活満足感に対する加齢効果・コーホート効果・時代効果」太郎丸博編『後期近代と価値意識の変容：日本人の意識1973-2008』、東京大学出版会、pp.75-97、2016年

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：前田忠彦

ローマ字氏名：Tadahiko Maeda

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。